

連作を可能にするイチジク台木品種「キバル」

豊前分場

1 背景、目的

イチジクでは、土壌病害である株枯病により樹体が枯死する問題が発生しています。発病園では多量の薬剤を投入しても再発防止が困難で、生産性が著しく低下した園や廃園も見られます。また、連作すると、樹勢が低下することも問題になっています。

そこで、イチジクの生産安定を図るため、株枯病抵抗性があり、連作ほ場での樹勢低下が少ない台木を育成しました。

2 成果の内容、特徴

- 1) 「キバル」は平成13年に「セレスト」を種子親に、本県育成系統「H238-107」を花粉親にして交配した交雑実生の中から育成したイチジクの台木用品種です（データ略）。
- 2) 株枯病発生跡ほ場に定植した「蓬莱柿」及び「柘井ドーフィン」の自根樹は5年間で60%の株が枯死しますが、「キバル」を台木にした接ぎ木苗（キバル台樹）では枯死株が発生しません（表1）。
- 3) 連作ほ場では、「キバル」を台木にすると樹勢が低下せず自根樹より収量が多くなります。（図1、表2）。

3 主要なデータなど



図1 「とよみつひめ」の「キバル」台樹と自根樹の生育
(左:「キバル」台樹、右:「とよみつひめ」自根樹)

表1 株枯病発生跡地におけるイチジク各苗の枯死株発生程度(平成15~21年)

品 種	苗の区分	定植 本数	年次別枯死株発生数						枯死株 発生率 (%)
			1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	累計	
蓬莱柿	キバル台樹	9	0	0	0	0	0	0	0
	自根樹	10	3	1	1	1	0	6	60
柘井ドーフィン	キバル台樹	9	0	0	0	0	0	0	0
	自根樹	10	4	1	0	1	0	6	60

- 注) 1. 「キバル」台樹は平成17年3月に、自根樹は平成15年3月に1年生苗定植。
2. 株枯病発生跡ほ場に各苗を定植し、株枯病菌胞子懸濁液を1樹当たり20ml
灌注。

表2 抵抗性台木「キバル」の利用がイチジク連作ほ場における
枯死株発生と収量および果実品質に及ぼす影響(平成21年)

品 種	苗の区分	供試 株数 (本)	枯死 株数 (本)	収量 (kg/樹)	果重 (g)	着色 割合 (%)	糖度 (Brix)
柘井ドーフィン	キバル台樹	3	0	28.6(143)	99.8	68	15.9
	自根樹	3	2	20.0(100)	84.6	69	16.7
とよみつひめ	キバル台樹	3	0	25.7(154)	75.9	69	17.8
	自根樹	3	0	16.7(100)	78.7	71	17.9

- 注) 1. 「柘井ドーフィン」は株枯病発生跡の連作地で、作土を入れ替えずに植え
穴の位置も替えずに定植。樹齢は平成21年で6年生、台木の長さは15cm。
「とよみつひめ」はイチジク連作地で、作土を入れ替えずに植え穴の位置
も替えずに定植。樹齢は平成21年で5年生、自根樹区は4年生で、台木の
長さは20cm。整枝法は「柘井ドーフィン」、「とよみつひめ」とも一文字
整枝(4×2m)。
2. ()内数値は、それぞれの品種の自根樹区を100とした対比。